
パラレル ほむら もうひとりの自分

窪まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラレル ほむら もうひとりの自分

【Nコード】

N9695Y

【作者名】

窪まり

【あらすじ】

パラレルワールドを行き渡る暁美ほむらの物語。さまざまな政治体制・文化・そして異なる時間軸を一ヶ月ごとに体験する。「パラレル少女・暁美ほむらちゃん」のリメイク。続編。

深夜の太陽 もう一人の自分（前書き）

もう一人の自分に、もう一度、出会う。

今度こそ、もう一人の私を救ってみせる。

昭和の雰囲気が残存している近代化が遅れた見滝原市での物語のはじまり。

深夜の太陽 もう一人の自分

パラレルワールドを渡り歩く魔法少女・暁美ほむらの物語。

「パラレル少女・暁美ほむらちゃん」のリメイク・続編。

魔獣との戦いとき、時空の歪みが生じた。時間遡航の魔法を使う暁美ほむらは、あらゆるパラレルワールドを行き渡る。

- - - - -

巴マミ・佐倉杏子・暁美ほむらは、今夜も魔獣との戦いをしていた。見滝原市の某駅のホームで、強い閃光があつた。

杏子「なんなの！この太陽のような強い光。まるで昼間の太陽みたい。閃光が眩しい！！」

マミ「わたしは長年、魔獣との戦いをしているのに、こんな体験は初めてだわ！」

ほむら「なにか、私を引っ張る力が働く。閃光に吸い込まれる！」

マミと杏子は駅のホームにある柱に必死でつかまつた。猛風が突き抜けた。「閃光に向かって風が吹いてきた！魔獣の新たな戦略？」魔法少女ではマミは、最もベテランであったが、このような状態での戦いは初めてだった。マミの風で帽子が取れて、閃光の中に吸い込まれた。

身体を食いしばって、暁美ほむらは閃光に向けて弓矢を引いた。

駅のホームの、あらゆるゴミなどが閃光の中に吸い込まれていく。まるで深夜の太陽に、あらゆるものが掃除機に吸い込まれる。

『ゴー!』という音という風の音が鳴り響いていた。

まるで地上にブラックホールが出現したかのようなのである。

閃光に向かって上斜め方向に重力を感じる。

まるで、空にも地面があるような錯覚を感じた。

そのとき暁美ほむらは、弓矢の矢を発射すると、身体が浮き上がり、閃光の中へと吸い込まれてしまった。

マミ「暁美さんー!」と叫んだが、ほむらからの返事がなかった。

杏子「くそー! さやかだけではなく、ほむらまでも円環の理に行ってしまった!」

マミ「魔獣の新たな戦略? でも魔獣までもいなくなったわ」

マミは魔獣までも閃光に吸い込むものは、なんなのか理解できなかった。

駅のホームは、真っ暗になった。そこには暁美ほむらの姿はない。

マミと佐倉杏子の二人の魔法少女の姿しかない。

- - - - -

気がついた時、夕方で、昭和時代の面影を残した街の公園にいた。魔法少女の服装のままの暁美ほむらが立っていた。

その時、ロングスカートのセーラー服の少女たちがいた。

数名の女子中学生が、一人の少女をかこみ公衆男子トイレの中へと連れて行かれようとした。

顔を見た時、三つ編みの髪型をした暁美ほむらと同じ顔をした少女である。

「やめて！助けて！」と必死に叫んでいた。

気を取り戻し、暁美ほむらは、数名で取り囲む少女たちの一人の肩をつかんで顔面を殴った。

「何なの！本気で殴ることないでしょう！私たちに言いかかりをつけるき！」と怒鳴った。

「わたしは、弱いものいじめが嫌いなだけ」とクールな口調で答えた。

魔法少女の姿のまま乱闘した。少女たち数名が一斉に、暁美ほむらに襲いかかるが、まるで武道の達人のように振る舞う暁美ほむらがあった。その乱闘で、何人かの少女たちは軽い怪我をして去って行った。

「大丈夫？」暁美ほむらは優しい口調で、もう一人の私の暁美ほむらに訪ねた。

「私は大丈夫です。ありがとう。私の名前は暁美ほむらです。」と弱々しい声で答えた。

暁美ほむらは愕然とした。

また、同じ世界に行ってしまったこと。

さまざまなパラレルワールドに行く運命になるのを悟った。

深夜の太陽 もう一人の自分（後書き）

短く、ちよくちよく連載させていただきました。

今度は、もう一人の私を殺させない

再び、もとのパラレルワールドに来てしまった暁美ほむらは、パラレルワールドに住む、もう一人の暁美ほむらを元気つけたいが、むしろ、元気つけて欲しいのは、暁美ほむら自身である。

『再び元のパラレルワールドに来てしまった。さっきの輝くブラックホールのようなものが、この世界へ送り込む時空の裂け目なんだわ。もう一人の私を慰めるよりも、私を慰めて欲しい。今回はQBがない』

もう一人の暁美ほむらは、その場から離れようとしたとき、暁美ほむらは「もう少し、話をしたい」と言った。しばらく街の公園にいないと、今度は『もう一人の無力な私が』不良少年たちに襲われるからである。

暁美ほむらは、次に起こることを知っていた。

翌朝、彼女が殺されることも知っていた。今度は、もう一人の暁美ほむらを殺させない。不良少年たちに襲わせない。暁美ほむらは、そう考えた。

もう一人の暁美ほむらは、髪の毛が少し短く三つ編みをして、太い額縁の眼鏡をつけていた。野暮ったいと思えるロングスカートのセ

ーラー服を着ており、スカート丈は靴の直前まで達していた。全体が濃紺のセーラー服を着ていた。

ほむら「ここで、しばらく話をしたいわ。実はあたしの名前も暁美ほむらだから」

もう一人の暁美ほむら「私と同じ顔をしている。あなたはどこから来たの」

ほむらは、答えるのに戸惑ったが「遠い街からきた」と答えた。

ほむら「この街は、かなり荒れているね」

もう一人のほむら「日本中が荒れているのを知らないの。どこに行っても同じようだよ。何十年にわたる不況で、みんな希望を失っているから、わたしみたいな鈍臭い人間を、いじめることで、日頃の鬱憤を、晴らしているのだよ。さっき助けてくれて、ありがとう」

二人とも公園のベンチに座り、少しでも長く話し合おうとした。

もう一人の暁美ほむらは、暁美ほむらのストレートで長い髪の毛を見ていった。

「あなた、なぜ、こんなに長い髪の毛しているの。そんなに長いと学校で注意されないの。でも、きれいだよ」

ほむらは、深夜の街を徘徊する不良少年たちに襲われないようにす

るために少しでも長く話し合い、翌朝、私服姿の女子中学生に殺されないようにするために、もう一人の暁美ほむらのアパートに泊まるうとして、少しでも話を弾ませようとした。

ほむら「でも、さつきは危なかったわね」

もう一人のほむら「私は、鈍臭いから、いつもクラスメートに虐められるの。学校の先生に相談しても、無駄。だって先生も生徒から傷害事件の被害者になることが良くあるの」

暁美ほむらは、少しでも話を長くさせるために、もう一人の暁美ほむらの話を聞きき、時間を稼ごうとした。公園の時計が午後9時になったら、もうひとりの暁美ほむらのアパートに行こうと考えた。

もう一人の暁美ほむらは、肩までの長さの三つ編みであり、校則が厳しいわりには、荒れていることと想った。そして、暁美ほむらがいた世界の、近代改装した見滝原中学校の自由な雰囲気、そして、みんなが仲良くなっている平和な学園生活とは全然違う事を知った。

もう一人の暁美ほむら「でも、あなたの服装、すごくモダンでかっこいいわ。でも、こんな派手な服装をすると警察管に声かけられるのではないの。中学生なんだし」

ほむらは、ちよつとした嘘をついた。「実は私、帰国子女で、まだ日本のことをよく知らないから」

もう一人の暁美ほむらは「なるほど」とうなづいた。

もう一人の暁美ほむらは、訪ねた「では両親はどこにいて、なぜ、この街に来たの？それに何で、そんなに喧嘩が強いのか？」

暁美ほむらは、他の世界から来たことを言っても信じてもらえない。そう深く追求されても困るのである。「それは……。私、実は親と喧嘩して、家出したの。だから今日は泊まる場所がない」と答えた。

もう一人のほむら「じゃあ、喧嘩が強いのは？」

ほむら「武道を習っていたから」

もう一人の暁美ほむらは「なるほど」と答えて、ほむらは安心した。

公園の時計は、午後9時を指していた。

ほむら『この時間なら、もう一人の私が住むアパートへの行く道には、あの不良少年たちはいない』と考え、もう一人の私が住むアパートへ二人で行った。

もう一人の暁美ほむらの悲惨な生活（前書き）

パラレルワールドの見滝原市は、1970年代のオイルショックから立ち直れないため近代化改装されていない。何十年も続く不況のため人々の心は荒んできている。退院後、市立見滝原女子中学校に転校した、もう一人の暁美ほむらは、転校初日からイジメ抜かれた。

もう一人の暁美ほむらの悲惨な生活

午後9時 暁美ほむらと、もう一人の暁美ほむらは、公園を出て、もう一人の暁美ほむらのアパートに向かった。

遠くにあるコンビニには、5人くらいの不良少年たちがたむろしていた。

車高が低い、違法改造車だと思える平べったい車が3台くらい停まっていた。

見滝原市では意外と自動車が少ない、ピカピカな高級車とボロボロになった軽自動車のどちらかしか走っていない。貧富の差の激しさを感じた。

70年代から走り続けていると思える360ccの軽自動車が故障しレッカー車に引かれるところを見た。そして、段ボールの家が延々と続く見滝原市であった。

日本が戦争に勝ったパラレルワールドでは、ホームレスの姿は滅多に見ることはなかったが、この世界の見滝原市には、多くのホームレスが存在している。

もとの世界の見滝原市とは違って近代改装されていないため昭和時代の雰囲気が残存している。

もう一人の暁美ほむら「今の日本のままだと、いづれ外国に吸収合併される」と言った。

「何十年も続く不況のため、今の日本はメチャクチャなの」

ほむら「そうなの」

もう一人のほむら「あなたは外国から来たから、まだ日本のことを知らないと思うけど、電車がものすごく混んでいなかった？ たまに古い茶色い電車も走るし。この街を走る電車も一時間に2本か3本で本数が少ないから、すごく込んでいるの。遠い街から来たから疲れていない？」

ほむら「ちょっと、疲れたわ」と適当に答えた。

ほむらは、再び悲惨な状態な見滝原市に戻ってしまった女神・鹿目まどかに怒りを感じた。

『なぜ、再び、こんな世界に戻らなければいけないの！』

無意識に、曉美ほむらは、もう一人の曉美ほむらのアパートへ向かって歩いて行った。

もう一人のほむらは「あなた、まるで私のアパートの場所を知っているように歩いているね」

ほむら「そうかな。この街、初めてなんだけど」

もう一人の暁美ほむらは不思議に思った。

もう一人の暁美ほむらのアパートに到着した。

彼女が住んでいるアパートは、トイレが共用であり、お風呂はない。いかにも1970年代のアパートそのものだった。

もう一人の暁美ほむらはポケットから鍵を出し、自分の部屋のドアを開けた。

部屋の中は何もない。殺風景な部屋だった。4畳半であり、ちょっとした台所があるだけであった。

テレビがなく、小さなポケットラジオしかなかった。当然、携帯電話もパソコンもない。

もう一人の暁美ほむらは、インスタントラーメンを作り、二人で食べた。

二人が食べ終わった時、もう一人の暁美ほむらは自分の境遇を語った。

「わたしは、転校した初日から、いじめの対象になったわ。転校生だから、モノを投げつけられるし、先生が注意しても、みんな騒ぐだけだし、それに、先生が叱ると、逆キレするありさまだし。」

もう一人の暁美ほむらも、しばらく心臓の病気で病院に入院し、見滝原女子中学校に転校した。

そして、転校生紹介のときでも、クラスでは、みんながワイワイ騒ぐし、輪ゴムをわたしのほうに向けて弾いたり、紙クズを投げつけられる。そして休み時間には、取り囲んで、悪口を言われる。

体操の時間、準備体操だけで貧血で倒れたら、横腹を蹴られる。体操の先生が注意したら、その横腹を蹴った女子生徒が逆キレして、体操の先生は何も言えなくなる。

それにしばらく入院していたから、学校の勉強が良くわからない。だからバカあつかいする。

もう一人の暁美ほむらは「わたし精神的にもう限界！もう一度入院したいわ」と泣いた。

ほむらは、なんと言っていていいか解らず黙っていた。

明日の朝、もう一人の暁美ほむらが殺されるかも知れないと思って、ほむらの表情は険しくなった。

『もう一人の私を絶対に殺させない』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9695y/>

パラレル ほむら もうひとりの自分

2011年12月2日19時57分発行